ひだご坊真宗教化センターだより

2025年12月号

Shinran 850th 800th

〈慶讃テーマ〉
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

発行日:2025(令和7)年11月25日　第65号　発行者:飛騨御坊真宗教化センター長・高山別院輪番　三島多聞

高山市鉄砲町６　TEL 0577-32-0776　web http://hidagobo.jp　✉ takayama@higashihonganji.or.jp

戦後80年を迎えて⑦　「非核非戦の碑」とその学び

―「非」のこころ、共に生きよの声―

■長崎と原子爆弾災死者収骨所

私は高山に赴任する前、長崎で勤務していました。戦後８０年を迎え、今回は長崎の原爆とその学びに触れる機会にしたいと思います。

１９４５年８月９日に長崎に投下された原子爆弾（以下、原爆）により、７万人の方が犠牲となりました。毎年８月９日には、長崎教会（長崎教務支所）で祥月命日の法要が勤められています。長崎教会には、原爆により亡くなり、野ざらしにされた方々のお骨を、ご門徒の方が中心となってして拾い集めた１～２万体とも言われるお骨の収骨所がある。収骨所には碑が建てられ「非核非戦」という言葉が刻まれている。

被爆直後の長崎教会

「非核非戦の碑」長崎教会

■「核」と「戦」の姿、キリシタンたちの悲しみ

碑に刻まれた「非核非戦」という言葉について尋ねていきたい。この言葉は同じ原爆が投下された広島県がある山陽四国教区（旧山陽教区）の玉光順正氏（元教学研究所長）を中心と方々から教えていただいた言葉で、長崎の人々はこの言葉を仏語として学んできた歴史がある。

まず「核」の字には、開発の闇を抱えた人間の姿が示される。原爆・核兵器まで作り出してしまった人間。「より成長することが良くなる」と満足することができない、欲の多い「貪欲」。驕り昂る憍慢心を抱えた人間の姿だ。

「戦」の字には、相手をどこまでも切ってしまう人間の姿が示される。国家間の戦争もちろん、個人の都合により、えらび、きらい、見捨てる人間のあり方を指摘している。どこまでも、いかり・そねみ・ねたむこころが絶えない「瞋恚」。差別心を抱えた人間の姿だ。

ここで「戦」に関わることとして浦上について述べたい。原爆の投下は天候が悪かったため①小倉→②長崎→③浦上（雲の隙間が空いていた）と投下場所がたまたま変更された経緯がある。

諏訪神社に奉納踊りをする②長崎の地域ではなく、弾圧されてきたキリスト教を信仰してきた③浦上の人たちの地域に落とされたため、次のような心無いことを言われた。

「原爆は長崎ではなく浦上に落ちた」「諏訪神社が原爆から守ってくれた」などと市民の間で言われるような状況であったという。同じ被爆者であるのに、私とあなたは違うと線を引き、差別していくあり方をしていった。たまたま投下地が変わっただけであるのに、宗教差別に被爆したという差別を更に人間が加えていったのだ。

■戦争責任の所在

この現状を憂えた永井隆氏（医学博士、随筆家）は、あえて神様が原爆を浦上に落としたのだとする文章を読んだ。これは神に多く祈りをささげてきた浦上の民が、戦争終結のために子羊として選ばれたのだとした。原爆投下の理由に神様を出すことによって悲しみをやわらげたとも言われる。しかし、戦争の責任を人間の側でなく、神の側の問題としてしまい、アメリカや日本の戦争責任を曖昧にするものでもあった。

この流れを変えたのが、１９８１年に来日したローマ教皇の演説において「戦争は人間のしわざです」と日本語で指摘したことである。これから戦争責任の所在についての議論が活発化していった。

長崎の詩人、山田かん氏は次のことを指摘している。自身の父は原爆投下後に黒焦げになって亡くなった子どもたちを見て「誰がこんな戦争を始めたのか」と泣き叫んだそうだ。山田氏は幼いながらに「あなたたち、大人が始めたのだ」と思ったという。父は真珠湾攻撃の時に、万歳と戦争の始まりに興奮し、アメリカのレコード割って戦争突入を喜んでいたそうだ。国にも責任があるが、父にも推し進めた責任の一端があるということに目を向けてないことを指摘した。

私たちは自分自身が見えにくい。自国、わが宗派、自分自身。近ごろ森達也氏（映画監督・作家）の話をお聞きしたことがあり「８月のジャーナリズム」という言葉を聞いた。日本は８月に戦争の被害のことは報道するが、加害の歴史はあまり言わないというものだ。特に自分たちの責任については目をつぶってしまう。このことはそれぞれが私自身のこととして聞き、戦争責任は神仏にあるのでなく、国家、宗派、個人にあると突き詰めて考えていかなければならないと感じる。

■「非」のこころ、共に生きよの声

「非」の字には、私たちにはたらきかけ、問いかける仏さまのこころが示されている。ずっと身に満ちている、「核」・「戦」を死ぬまで抱えている私たちに「気づきなさいよ」とはたらきかけるのだ。

親鸞聖人は「非僧非俗」として権力に認められた「僧」でもなく、「俗人」でもなく、ただ一人の念仏者としての歩みを問うていかれた。この問うということ。この「非」の字をもって、長崎の人々は「核」・「戦」の課題を自身と社会に問い人生を歩んできたのだ。「愚癡」のわが身は「非核非戦」の言葉をたよりに死ぬまで仏さまの教えを聞き続けていかなければならない。この言葉の学びから、原爆の作った悲しみは、人間の無明煩悩の闇をあぶり出したと言ってもよいのではないかと考える。

原爆投下後も「平和利用」の名の下に原発を利用し核の問題を抱え、世界は国々で他者をきらい、戦争を起こし続けている。現在の日本の姿をすでに「戦前」と語る人もいる。この問いかけを受け、それぞれの責任として、加害に向いてないか、自身の行動や発言がどうなのか、現在や未来を考えて歩んでいかなければならない。「非核非戦」の碑に刻まれたもう一つの言葉、「共に生きよ」をどういただいていくかだ。

岐阜高山教務所　駐在教導
中川　唯真

★センター・別院からのお知らせ★

高山別院報恩講勤修　2日帰敬式受式者61人　高山別院

１１月１日から３日、今年も高山別院報恩講が厳修されました。既報の通り、今年度から日程が変更されての厳修となりました。期間中は天気も良く、延べで屋久００人の方にご参詣いただきました。

帰敬式の執行も２日となり、御逮夜法要にお参りいただく日程に変更され、法名伝達については、御逮夜後に、受式者の所属寺院の住職から直接手交されました。

市長と語る会　高山市の田中明市長が別院を訪問しました。

高山市長の独自事業で旧市内各事業所のみならず各支所地域の事業所訪問される中、１１月１９日に高山別院を訪問され短時間の中で、市長より市政の報告、要望等の話し合いの後、輪番より別院の歴史、ひだご坊真宗教化センター活動についてお伝えしました。中でも金森長近公と嘉念坊善俊上人との関係について興味深く聞き入れられていました。

嘉念坊善俊上人顕彰会会報　第33号発行

同封されておりますので、是非、ご一読ください。

《連載》　「同朋会運動」としてのハンセン病問題 ―謝から共なる解放へ―　②

■私とハンセン病問題との出会い②

〔究極の排除とは、誰もその存在を知らなくすること〕

そういうような過程の中で、解放運動推進本部に入って７年後、大谷派が謝罪声明を出した時に、ようやくハンセン病療養所に身を運ぶご縁をいただきました。機が熟すまで７年かかったということでしょうか。

初めて療養所を訪れた時にまず感じたことは、自分の親くらいの世代の人たちが大勢療養所の中で生活されておられるのですが、私は、それまでその人たちのことを全く知らなかったのだということです。申し訳ありませんというという言葉が思わず出てまいりました。その人と面識がないというのではなく、存在を知らなかったという感じです。しかし、それこそが隔離政策というものなんです。世の中の誰も、その存在を知らなくさせるというのが、究極の隔離であり究極の排除です。そう気づいた時、「私の差別心の問題」に落とし込んでこの問題を考えていこうとしても、無理が出てくるのです。あえて言うならば「差別する」という関係もないのです。世の中で誰も自分のことを知っている人がいなくなる。これほど厳しいことはないのではないでしょうか。そういうことが現実に起こっていたのです。

〔予防法が廃止されても何も変わらない社会、
何も変われない私〕

療養所に初めて訪問して半年くらいたち、訪問を重ねる中で、ようやく同朋の会の場で言葉を発することができるようになってきた頃、何気ない気持ちで集まった人たちにお尋ねしたのが、「予防法が廃止されて療養所や皆さんはどう変わりましたか？」という、後先を考えない質問でした。それに対して発せられた言葉は、「私たちが変わらなければいけないのですか？そうしたら、あなたは、社会はどう変わってくれましたか？」という私への逆の問いかけでした。今でもその言葉は、私の中でこの問題に取り組んでいく原点になっています。そして、その問いかけに「私はこう変わった」「大谷派はこう変わった」「社会は、国はこう変わった」と、３０年近くたった中で、隔離の被害を受けた方たちに、私たちはどう答えられるのでしょうか。

当時、なぜそのような問いを発せなければならなかったのか。それは、その人の個人的なことではなく、その時の療養所がどのような状況に置かれていたのかということを抜きには考えられません。少し言葉が過ぎるかもしれませんが、予防法が廃止されても何も変わらない現実があったということです。

そのころ入所者の方から、予防法が廃止され、５０年ぶりに兄から電話がかかってきて、そこで言われたのが「予防法が廃止されたからって家に帰ってくるつもりじゃないだろうな」という言葉だったということです。とっさに「自分はこんな病気になって、皆に迷惑をかけた。自分は療養所の中で静かに死んでいくからそんな心配はしなくていいよ」と言ったら、「ようやく、村の周りの人もお前のことを忘れかけてきた。うちがハンセン病患者を出した家だという意識も薄らいできた。このまま静かに療養所の中で暮らしてくれ」と言われたんだ、という話をお聞きしました。さらにその人は、「村や家族と切り離され、家族を守るために療養所に入った。その時の気持ちは、人生の中で一番苦しい絶対思い出したくない気持ちだ。そんな思いを今またしなければならないのなら、らい予防法なんか廃止されなければよかった」とも言われました。「予防法が廃止されても何も変わらない療養所」。当時のハンセン病問題の現実であったと思います。

「らい予防法」が廃止されハンセン病国賠訴訟に勝訴し、国がようやくこの問題への少し実効性のある政策を始めるまでの５年程の間に、療養所を退所した人は、入所者の１パーセントもおられません。これは、社会は何も変わっていないという証拠だと思います。「友だちは予防法が廃止される前に亡くなった。最初はその人のことを可哀そうだと思った。でも今はそうは思わない。彼は、何も変わらない現実を見なくて済んだのだから。予防法が廃止され、夜明けが来ると信じて死ねたから、彼の方が幸せだったかもしれない」という言葉も聞かせてもらいました。それくらい、予防法廃止に対する思いを強く持っていたにも関わらず、そこで目の当たりにしたのは、何も変わらない療養所であり、社会であり、何も変われない私たち一人ひとりだったのです。

１９９６年、真宗大谷派は「謝罪声明」を出して新たな歩みを始めることを宣言しました。そのことは、〝公〟としてはとても大きなことであると思います。しかし、そのことが療養所に居られる人の〝一人〟としての解放ということにどれだけ繋がるのか、どれだけ繋がったのか。それが、謝罪声明を発した宗派に与えられた最初の問いであり、現在進行形の問いだと思います。その問いは、現在のハンセン病問題をめぐる状況に向き合うところからしか答えられないものです。

この後、その状況を「ハンセン病問題の現在地」として確認していきたいと思います。

元解放運動推進本部本部員
三重教区金藏寺住職　訓覇　浩

飛騨御坊 HP『ひだご坊一口法話』11 月　春國立真氏（高山２組玄興寺衆徒）　白尾幸子氏（高山２組了心寺坊守）

真 宗 公 開 講 座　１２月４日（木）午後２時～　　講師：北條親善氏（岡崎教区）
目の前のお方をただ人と思うなよ―山谷での炊き出しを通して―

飛騨御坊真宗教化センター・高山別院　2025 年 12 月行事予定

日	曜	時間	ご坊センター・高山別院・教区・組	会 場
1	月			
2	火			
3	水	13:00 14:00	別 ３日のご坊　法話：佐藤 義晃師（了徳寺住職） 教 行財政改革区説明会	本堂
4	木	14:00	セ 真宗公開講座④（講師:北条親善氏）	御坊会館
5	金	13:30 18:00	教 部落差別問題に関する協議会 セ 帰敬式推進室　第２回実行委員会	センター室 研修室
6	土			
7	日			
8	月	14:00	本 全国教学研鑽機関交流会　事前学習会	研修室
9	火	14:00/19:00	教 第２回　『御同朋を生きる』輪読会	研修室
10	水		教 岐阜別院報恩講団体参拝	
11	木	13:00 13:30	別 大谷婦人会定例会 法話：三島 多聞（輪番） 組 高山２組坊守会	御坊会館 研修室
12	金			
13	土	7:00	別 前住上人ご命日	本堂
14	日	13:00	別 半日華 別 納骨経	本堂 本堂
15	月	13:30	組 高山２組組会	研修室
16	火	16:00	教 教化研究所	研修室
17	水			
18	木	15:00	セ 第１回企画会議	研修室
19	金			
20	土			
21	日	13:00	別 お煤払い	本堂
22	月	13:00	別 松すべき	
23	火			
24	水	14:00	教 是旃陀羅実行委員会	センター室
25	木			
26	金			
27	土	13:00	別 お逮夜 教 教務所・教務支所　年末年始事務休暇（～1/6 まで）	本堂
28	日	7:00 13:00	別 一日華 別 親鸞聖人御命日　法話：石井　宗師（西教寺住職）	本堂
29	月			
30	火			
31	水	23:00	別　万灯会	

2026 年 1 月　※中旬までの掲載とし、定例行事は省きます

日	曜	時間	ご坊センター・高山別院	日	曜	時間	ご坊センター・高山別院
1～3			別　修正会				